



「見たり、聞いたり、探ったり」No.257

通算 No.408

青 木 行 雄

東京五輪、57年ぶりに開幕(国立競技場) コロナ禍無観客(2021年(令和3)7月23日)

第32回夏季五輪東京大会は2021年7月23日夜、東京都新宿区の国立競技場で開会式が行なわれ開幕した。新型コロナウイルスの影響で史上初の1年延期となった大会は、東京都に緊急事態宣言が発令され、直前に大会組織委員会の不祥事等が相次ぐ中、熱戦の火ぶたが切られた。

東京開催は1964年(昭和39)以来57年ぶり2度目の開催である。北朝鮮を除く205の国・地域と難民選手団も含め約1万1千人の選手が参加し17日間、史上最多の33競技339種目で行われる。

10都道府県42会場のうち、宮城、茨城、静岡の3県5会場を除く37会場は無観客開催になるという。

開会式には菅義偉首相や東京都の小池百合子知事、組織委の橋本聖子会長、国際オリンピック委員会(IOC)のバッハ会長らが出席、入場行進は五輪発祥のギリシャを先頭に五十音順で入場し、日本選手団は最終206番目だった。

大会名誉総裁を務められる天皇陛下が開会を宣言し、121日間かけて全国をめぐる聖火が聖火台に点火された。

今回史上最多の583人で編成される日本選手団は金メダル30個を目標に掲げている。

23日午後8時、花火が国立競技場全面に打ち上げられ、祭典の幕が上がった。会場に設置された日本の2大シンボルである富士山と太陽を表現したメインステージが照らし出される。ただ、本来



五輪開幕の当日花火のセレモニー。



五輪開幕、聖火台に火がともる。



五輪のシンボルマークを会場へ。

なら大観衆をのみ込んでいるはずだったスタンドに人影はなく大会関係者や報道陣だけでテレビ観戦で見る人もなにともしみしさを感じたが。

天皇陛下が国際オリンピック委員会 (IOC) のバッハ会長とともにご入場、続いて、シドニー五輪女子マラソン金メダリストの高橋尚子さんらによって日本国旗が運びこまれ、歌手の^{ミーシャ}MISIAさんの豪華なドレス姿で歌う「君が代」に合わせて掲揚された。

その後、俳優の森山未来さんによる舞踏が披露され、10年前の大震災と共に新型コロナで命を落とされた人々へ^{もくとう}黙祷がささげられた。

新型コロナは大会の「顔」である開会式のあり方にも大きな影を落とした。東京に緊急事態宣言が発令されている中、感染リスクを抑えるため、ほとんどの競技で無観客開催となり、開会式場も例外ではなくなった。

観客だけでなく式典自体への参加入数も絞り込まれたのである。近年は1万人超の選手・役員も参加していたが、IOCのコーツ調整委員長は昨年11月、コロナ禍の中入場行進に参加する役員の数を制限すると表明した。同12月には選手村に関する指針を公表し、入村は原則競技開始5日前から、競技後は48時間以内の退村を求めている。柔道など大会前半に行われる競技の選手は閉会式、大会後半の陸上選手は開会式への参加が難しくなったようだ。

またIOC役員や各国の来賓ら大会関係者の参加は当初1万人程度を見込んでいたが、海外からの来日見送りなどもあり、かなり抑えられたという。

選手入場は午後8時40分ごろから、ギリシャを先頭にスタートし始め、オーケストラが奏でる「ドラゴンクエスト」などの日本が世界に誇るゲーム音楽に乗せ、200を超える国・地域の約6000人が50音順に入場した。みな一様にマスクをつけ、1人1人の距離を空けてゆっくり歩いていたが、五輪に参加できる興奮と喜びを表現しようと、肩を組んだり、跳びはねる連中もいて、密の状態の国もあった。

女性の容姿をめぐる差別発言や過去のいじめ問題など、直前まで関係者の不祥事も相次いだ開会式で



1964年（前五輪開催）時に植林した木材で製作して会場へ運ばれた五輪の集成材。北海道遠軽町より。



聖火台と会場風景。観客がいなのが残念である。



日本の伝統、木工作業を模したパフォーマンス風景。

もあった。国内の感染増加傾向にも歯止めがかからず、来日した選手や大会関係者も検査で陽性が確認されたケースも相次ぎ、前日の22日は東京で感染者1,979人、全国内では5,397人も発生したが、そんな中ではあったが、世界が注視する「コロナ禍の五輪」は幕を開けた。

東京五輪会場のシンボルである「国立競技場」に縁あって旧会場から新競技場まで、建設工事にかかわることが出来て、新会場工事期間中3年以上お世話になった。毎日定期的に安全大会が開催され、必ず参加、進行状況を把握できた。これ程の大工事は2度とかかわる事はないと思う。

一日の作業員多い時で4,000人、1日の入荷作業用トラック多い時で400台、作業員全員が誇りに思っ
て仕事をしていた。毎日の安全大会が楽しみだった。

2019年12月に完成して、オープン式には大変感動したが今回の東京五輪開幕も、無観客ではあったが感動も3年以上の関わりに涙する思いだった。また、五輪会場として建設された建築現場、21会場や、会場整備の為に土木工事等とかなりの現場にお世話になった。それにしてもコロナ禍とはいえ、無観客とはさみしい思いでいっぱいである。

振り返れば、東京五輪の開催が決まった、2013年(平成25)、以降、話題の中心は周辺ばかり、国立競技場の計画白紙から始まり、招致買収疑惑、五輪マークの変更などなど、そして新型コロナで一年延期となり、IOCの幹部の言動や森大会組織委員会前会長の女性蔑視発言等、そして無観客開催、列挙した



2016年、新国立競技場建設工事。始めた頃の現場風景。



2018年、国立競技場、建設現場。完成の1年ほど前の風景である。



オリンピック開幕当日の国立競技場。



2019年オープンセレモニー当日の屋内の国立競技場。

らきりがないほどいろいろなことがあった。主役であるはずの選手達とは関係のないところでいろいろな事が発生した。

しかし、アスリートは迷うことなく、思い切りプレーをしてほしいと思う。

このコロナ禍では国・地域によって、練習状況は大きく異なる。大会直前の来日になり、時差調整や暑熱順化に苦勞する海外選手も多い。試合直前に陽性となり、棄権する選手も出ている。

メダルの位置付けは「世界一」というよりこの状況下でも自らを信じ、たゆまぬ努力をし続けて来た証である。このコロナ禍の中、メダルを勝ちとられたアスリートの人達へ東京大会ならではの価値と信じてがんばってほしい。

57年ぶりの五輪を前回と比較すると

	1964年(昭和39)	2021年(令和3)
参加国数	93カ国・地域	205カ国・地域
選手数	5152人	約1万1090人
女子割合	13.2%	48.8%
日本選手団	355人	583人
実施競技・種目数	20競技163種目	33競技339種目
開催時期	10月10日から15日間	7月23日から17日間

開幕・開会式冒頭に黙々と一人でトレーニングするアスリートが登場した。ランニングマシンに乗る女性ボクサー、看護師・津端^{つばた}ありさ(28)である。

真っ白なウェアに身を包み、凜とした表情で困難な状況でも夢を諦めない選手の姿を表現したという。

昨年3月アジア・オセアニア予選で敗れた直後、病院に戻った。実態もよく分からないウイルスの症状を訴える患者が次々と運ばれてくる。防護服に身を包み、対応に追われた。五輪延期の衝撃は吹き飛んだ。

それでも業務が終われば、公園など1人で練習できる場所を探して夜遅くに汗を流した。ダイエット目的で始めた競技が、周囲に希望を与え始めたからだ。「津端さんの試合が楽しみ、頑張って」。患者や同僚の看護師が伝えてくれた。医療現場でスポーツの価値を感じることができた。

コロナの影響で世界最終予選は中止、自身の東京への挑戦は残念な結末になった。失意に暮れたが、仲間の前では気丈に振る舞い練習した。ボクサーとしての成長は止めなかった。

今春「多くの人が亡くなっている。五輪をしていいのかという声があるのは当然だと思う。でも選手は一日一日に人生を懸けている。その努力が報われてほしいと心から思う」と語っていた。7



モクモクとマシンの上を走り続ける津端ありさ氏。

月にはドイツの五輪選手の練習パートナーを務めた。

真夏の開会式は夢への通過点、看護師としてボクサーとして、未来に光が差すことを祈っている。

こんな、看護師ボクサー「夢諦め^{あきら}ない」の思いから「津端ありさ」を開会式に登場させたという。

やっぱり、オリンピックと言え、最大の見せ場となるのは、聖火台にトーチの火を移す最終聖火ランナーのことである。その最終ランナーは本番までトップシークレットとされているらしい。

1964年（昭和39）、10月10日午後「戦後復興と平和」をテーマとして前回東京五輪でその大役を担った人は「坂井義則」さんだった。当時の国立競技場のバックスタンド最上段に立ち、聖火台に点火する姿は、64年大会を振り返る度に繰り返し映し出されてきた。

当時の坂井さんは早大の短距離選手だった。目標とした五輪への出場はかなわなかったが、いまでは、メダリストにも負けないほどの知名度という。

広島に原爆が投下された1945年8月6日に広島県三次市で生まれた。それから19年後に開催された東京五輪。敗戦から復興を果たした五輪を象徴し、最終聖火ランナーには未来への可能性を体現する若いアスリートがふさわしいという考えが組織委員会にはあったという。

前日は雨だった。それが一転して開会式当日はこれ以上ない快晴。超満員の観客席に聖火台へ刻まれた一本道を駆け上がる。最上段からの眺めは絶景だった。

「真っ青な空、高層ビルもまだない、まさに特等席で、本当にきれいだった」

以上が57年前の1964年（昭和39）聖火ランナーの感想である。

2021年7月23日、聖火ランナーについて

式典の運営責任者を務めた「日置貴之」氏によると、

聖火リレーは、ダイバーシティ&インクルージョン（多様性と調和）を意識して慎重に人選したといわれる。

最終走者は世界的大スターで、人種差別問題も訴える大坂選手が務めたが、実際にできるかどうかは不透明だったという。難点はテニスの試合が開会式の翌日から組まれていた。しかし、五輪に夏冬あわせて7回出場している元アスリート、組織委の橋本聖子会長は、その話を聞いて、後押ししたようである。

クライマックスである聖火台への点灯式。競技場ではさまざまな顔ぶれが聖火をリレーした。最初に会場へ出てきたのは、ともに五輪3連覇の野村忠宏さんと吉田沙保里さん。続いて、プロ野球巨人で人気を博した長嶋茂雄さん、王貞治さん、大



最終ランナーのトーチは黒色のようなのである。大坂なおみが受けている。

リーグ・ヤンキースでも活躍した松井秀喜さんが登場し、コロナ下で奮闘する医師と看護師の医療従事者、夏と冬の両方のパラリンピックで金メダルを獲得した土田和歌子選手、岩手、宮城、福島
の被災地の子どもたちが、大坂選手につないだ。

長嶋さん、王さんを起用した理由について日置氏がこう説明した。

「レジェンドであるということがすべて。1964年の(東京五輪)世代から我々の世代まで誰もがあこがれるヒーローであるのは疑いの余地がない」と話した。

コロナ禍で1年延期になった東京五輪の開会式は簡素化を図ったり、直前に演出が変更したりした。

式で注目を集めた1964年大会で作られたピクトグラム(絵文字)の紹介、全50種をダンスで表現したが、当初よりダンサーの人数を減らし、3人で5分間を演じきった。

又日置氏は「簡素化をめざしてきたので、かなり負担をかけてしまって申し訳なかったと思います」とももらしていたという。

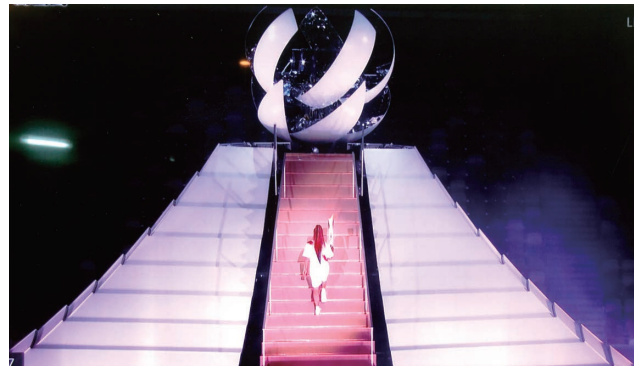
また音楽担当の小山田圭吾氏が辞任し、演出全体の調整役だった小林賢太郎氏が直前に解任された。こうした異例の事態についても日置氏は会見で謝罪したという。

控えめな演出や簡素化を印象づけた格好というが、無観客の競技場周辺では五輪中止を求めるデモの声が響いたようだ。その様子を撮影していた海外メディアは「彼らの気持もよく理解できる」と感想を語ったという。

いずれにしても、聖火台への最終点火者を務めた「大坂なおみ」選手(23)は、テニスの初戦は1日ずれて25日になり、無事に大役を果たすことが出来た。

「今後人生の中で、アスリートとして最高に名誉なこと。今の感情を言葉で表すことはできないけど、感謝の気持でいっぱいである」と語っていた。

このコロナ禍の中で実行した、東京五輪が無事に成功されることを祈るばかりである。



聖火台の階段を登る最終聖火ランナーの大坂なおみさん。

2021年7月25日記

参考資料

日経新聞

朝日新聞

産経新聞

東京新聞

NHK テレビ